

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

25 名づけられた子ヤギの災難

第二十五日め（四月九日）

日の出がすこしずつ早くなっていく。

午前五時半で、すでに日はのぼり、空はすっかり明るい。マイナス二度。早朝のうちに、エルデニ姉が群れの外側をまわり、出産しているヒツジ・ヤギたちを確認する。朝の哺乳補助も、乳茶のまえにすませてしまう。朝の仕事が急にはやくなった。

けさは七組の母子を群れからとりわけて、午前七時四十分。もう日は高い。ウジチャが、「全部でもう百をこえたでしょう」

という。わたしのノートでは、まさにけさの時点で百をこえ、百二頭を記録した。ウジチャは、全体の数をつけていないにもかかわらず、かなり正確な数を把握している。

午前十一時すぎに、突然イヌが猛然とほえはじめる。車だ。いつもみなれた4WD車がこちらへむかってやってくる。うしろには、中国製のジープ車が一台つづいている。予想もしない外事局の再来。いったいなにごとであろうか、と不安になる。

車のなかから、みなれた顔がほほえむ。わるい話ではなさそうである。シリントン盟地区の外事局のスタッフが、内蒙古自治区クラスの外事局のスタッフを紹介する。家人の紹介につづいて、わたしも紹

介される。かれらは、来夏、中国に駐在する諸外国の大使たちが草原をおとずれるので、その準備かたがた接客地点を決める、ということであった。北京に滞在している諸外国の大使を、このシリングルの草原にまねくことが決まっている、という。大使たちを数グループに分散して接客するらしい。おそろく、このダンゼン家も、接客ポイントの一つになるであろう。

大使たちをむかえる夏の接客よりも、とりあえず、いまの訪問客のもてなしがさあ大変。ちようど水がぎれているところだから、まず水くみ。エルデニ姉が、まだらの去勢ウシにくびぎをかけ、水桶車をひいて井戸へむかった。イヌがうしろをついていく。台所の小屋には、セルゲレンとモージがたはたらき、子どもの面倒はトヤーとホクシン・エージがみる。あわてて準備をはじめたところが、他の訪問予定があるらしく、外事局の方々は乳茶と乳製品だけをあじわって出発。

予期せぬ来客につづいて、近隣の老人がウマでやってきた。ウマとり棹を手にした訪問である。いったいなんの目的であろうか。老人は、大きなゲルのなかにはいり、ダンゼン父に挨拶をする。二人は、さっそくかぎタバコを交換しはじめた。

モンゴルの男たちはかつて身だしなみの一つとして、かぎタバコをたしなんだ。いまでは、もっぱら老人たちがその風習を維持するばかりとなっている。玉や瑪瑙などでつくられたかぎタバコいれを、手と手でにぎりあいながら交換して友情をあかす、という挨拶である。かぎタバコいれの蓋は、たいてい赤い。珊瑚の赤が好まれている。かぎタバコいれは、片手ですっぽりおおいつつ交換するので、そこからみえない。みえるのは、赤い蓋の部分だけ。二人の手のなかで赤い宝石が交換されているようにみえる。

蓋をとり、蓋の内側についている小さな匙で、かぎタバコの粉をすくう。そうして、たいていの老人は、左手の親指の爪のうえに粉をのせ、鼻の穴におしあてて、かぐ。実際にかがず、しぐさだけが遂行



訪問客ときタバコの交換

されることもある。ダンゼン父も現在ではすっかりタバコをやめており、挨拶のために形式的にかぐふりをするだけである。

かぎタバコの挨拶がすむと、訪問客はさっそく用件をぎりだした。こういう客はめづらしい。たいていの客は、かえるときまで用件がわからないのに。この老人は、自分のウシたちをさがしていた。あの吹雪のはじまった日つまり四月三日以来、ウシの群れが行方不明になっているのであった。約二十頭がみあたらないという。ウマとり棹は、いざ発見されたときに、必要なのであろう。

老人は、他の家の被害状況についても情報をもたらしした。となりのガチャであるバヤンオンドルの群れをうしなつたという。漢族の牧人をやっていた。あるヤギが出産して群れからおくれているので、それを追ううちに、群れ全体をみしうなつたらしい。吹雪のなかで群れがみつからず、やがて家の方向もみしうしなう。やっと帰宅して家人に知らせ、総出で搜索するが、なにしろあの吹雪。

「ブール、ボロー、ヤブジェー」

とは、まったく、まちがっていった、ということ。とんちんかんな方向へさがしにいったのだった。数百はこちらの群れ、また数百はあちらの群れというように、群れはちぎれて、別の家の群れにまじっていた。そしてまた数十頭が、山のすそ野のくぼみにはいつてももれていった。雪のなかからほりだして、数頭は生存していたが、三十余頭が死んだ。行方不明はいまなお二十余頭ある、とのこと。

九百頭の群れをうしなつたといつても、実質的な損失は、数十頭にとどまるようである。それでも、不用意な損失であることにまちがいはない。一对の母子ヤギのために、多くを犠牲にしまった。牧人は、一对の母子ヤギをこそみすてるべきだったのである。

大失敗をしたその牧人とくらべると、われらが羊人ソヨルトは、たしかにすぐれている。ソヨルトはよわいものはみすてる。しばしば、

「これはドトーだ」

などといつて子畜をみはなす。ドトーとは不足という意味である。たとえば早産や、あるいは二歳の未成熟なメスからうまれた子畜などを、まったく最初から数に勘定していかない。そういう判断がそもそも正当なのであろう。

四月三日の夜のテレビは、たくさんの雪がふり、ゾドになるといふ予想を放送していた。となりのアバガ旗では、対策のための車をあらかじめ分与するのでガチャ（隊）の長は集合するように下命があった、とも伝えていた。実際には、それほど重大にはいならなかった。しかしながら、被害にあった家もあることを思えば、やっぱり天には目があるらしい。

午後二時、最初の経が読みおえられた。ラマ僧が読了の旨をつげると、ダンゼン父は、モージ母に孫たちをよびにやらせた。老父母たちは、ラマ僧のそばに正座し、頭をつきだす。すると、ラマ僧はたっ

たいま読みおえたばかりの経を、つきだされた頭のそばでパラリとめくった。さらに、老父母は経書に額をつける、孫のアルターもそれをまねた。最後にラマ僧は、けさヒツジに食べさせていた粉を、皆にふるまった。それは、アラシャンすなわち聖水とよばれた。

ラマ僧は、つづいて別の経にとりかかる。経の名前はドルジージョブラー。地獄へいく苦しみを消すためのもので、閻魔大王にそなえるための経である、という。

お経を解説してくれるのは、もちろんラマ僧。温厚な顔つきの老僧は、名をユンダンジャムツという。アバガ旗出身なので、通称アバガ・マーム。マームとは、親しいラマ僧へのよびかけである。当年とつて七十四歳。名前、出身、年齢などをひととおり質問しようとすると、

「どうして、そんなことをきくのか」

と逆襲をうける。こういう場合、正直いって、返答にこまる。正当な理由なんかあるわけない。かといって、不当な要求であるとも思えない。もちろん、秘密をさぐるというわけではない。だから、自分のことをいってしまうのがいちばんだと思う。自分のことをあれやこれやとかたりながらなら、相手も自分のことをはなしはじめ。それでもなおはなしてくれないようなら、もうそれ以上はたずねない。プライベートの問題をたずねる正当な理由など、最初からないからである。

温厚なアバガ・マームは、わたしの意図を理解したようだった。つまり、明確な目的などなくただたずねているだけなのだ、ということを理解してくれたらしい。自分の生いたちを説明してくれた。

アバガ・マームは、二人の姉と一人の弟をもつ四人きょうだいの長男であったが、子のない家に養子にだされた。養家では、別の家から養女をもらったので、妹と二人きょうだいになった。一人息子なら、普通はラマにはしない。養家ではまさに一人息子であった。しかし、養父母が自分を愛し、自分もなりたかったからラマになった。養父母が愛してくれたために、ラマになることをのぞんでくれた、という。



読み終わった経をもって宿営地をまわりあるく父

七歳で文字をまなび、九歳でラマになる。それから自分のそだった家を出て、他人の家にすんだ。寺すまいではなく、在家の僧であった。十五歳から寺にすむようになった。文化大革命の時代には、還俗し、妻をめとった。二人の娘はすでにそれぞれとついで、妻は死んだ。そこでふたたび、ラマとしての生活をはじめた。

エルデニ姉さんが、ミシンをかけている。経をつつむ四角形の布をつくっている。「ジャンチ」とよばれるもので、アバガ・マームへのおくりものとなる。

午後三時をすぎたころ、わたしは南家のチョルム宅へむかった。エルデニ姉さんの娘をおくりとどける、というのがわたしに課せられた役割だったからである。

チョルム姉さんの家に到着。家のなかはとても土臭い。戸口付近の一角が板でしきられていて、なかには子ヤギがいた。双子のヤギのうち、母親が認知しない片方が哺乳びんでそだてられている。だから、チョルム姉さんの家は、土や草のかおりがするのだった。

チョルム姉さんは、このように家畜を家のなかにいれて手をかけて飼育する。いっぽう、隣にすむ姪たちの世話をやく。さらに異邦人のわたしにも、なにかと話をしてくれる。こちらがなにも質問しないうちに、いろいろな話をする。こころのへだたりを感じさせない女性である。

チョルム姉さんが結婚したのは、十八歳のとき、養父と少々折り合いが悪かったこともあって、さつさと自分で相手を決めて、独立してしまった。結婚してみると、夫は呑んだくれだった。毎日、朝から酒を呑んでふらっと出かけてぶらつく人だった。家にいつかない夫とのあいだに子はなかった。彼女が最初に養子にしたのは、実の弟。母が四十五歳のときの子である。高年齢出産のため産後の肥立ちが悪く、母は町の病院に入院することになる。赤ん坊は病院で面倒をみてもらえないため、とりあえずチョルム姉さんが赤ん坊の面倒を当面のあいだみることになった。その時点で養子にしようと思っていた

わけではない。やがて母はもどってきたが、赤ん坊はそのまま彼女のもとで育てられ、いつのまにか養子ということになった。つぎの養子は弟の子ども。弟が再婚するとき、先妻とのあいだにあった子を彼女がひきとった。こうして彼女は二人の子を養育し、それはいまもつづいている。

おそらく南家で宿泊するのは、最後になるだろうこの夜、一匹の子ヤギがけがをした。全体が灰色をした子ヤギである。子ヤギのうえに囲いの門につかっていた鉄柵がたおれ、そのうえをウシがふんだ、という。リンチェンドルジ兄さんが、マッサージをこころみる。首をひっぱったりしている。簡単な応急処置しか、すべはなかった。この子ヤギ、たしかにみおぼえがある。

それは、はじめてこのチョルム姉さん宅を訪問した日にうまれた双子のヤギの片方であった。オートではこぼれた、あの子ヤギである。わたしの来訪を記念して、ナランツェツェック「日の花（ひまわり）」という名前のついた子ヤギであった。わたしが名づけ親であった。

本来、個体の名前などもたないのが、モンゴルの家畜である。特別の個体史などがあってはじめて、人の名前のような名があたえられることがある。ところが、子ヤギのナランツェツェックは、名前がまずあたえられてしまった。そのためにかえって個体史がうまれたようなものだ。名前があたえられたために、災難にあり運命をよびこんでしまったように思えてならない。

ナランツェツェックの運命をいちばん心配したのは、名づけ親などというまったく余計なことをしかした、わたしであつたらう。